

# 第10回 ベンチャーズブームから 生まれた『二人の銀座』

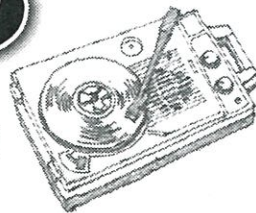
エレキギターをフィーチャーしたサウンドで日本中の若者(特に男性です)をとりこにしたザ・ベンチャーズは、1960年(昭和35年)に米国でデビューしています。

日本でベンチャーズ・ブームが巻き起こるのは昭和40年からです、予兆はその前年にありました。

昭和39年、「東京オリピック」開催直前の夏、日本の若者たちの関心は『東京五輪音頭』よりも米国のバンド、アストロノウツが奏でる『太陽の彼方に』のエレキサウンドに寄せられていました。寺内タケシも自らのバンド、ブルージーンズを率いて同曲をカバーし、日本中が「乗ってけ、乗ってけ」とばかりにサーフィン音楽に夢中でした。

ベンチャーズが牽引するエレキブームは、翌昭和40年1月、彼らの2度目の来日で一気にブレイクします。「炸裂するエレキ! 爆発するビート!」と書かれた宣伝コピーがその熱狂ぶりをよく表わしています。当時は、シングルレコードとLP

レコード(アルバム)以外に、コンパクト盤という4曲入りのお徳用レコードが発売されていました。サイ



## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵・松本 浦



ズはシングル盤と同様の直径17センチですが、回転数はLPと同じ33⅓です。

ベンチャーズの2枚目のコンパクト盤が発売されたのは昭和40年の4月、収録曲はA面に『ダイヤモンド・ヘッド』と『パイプライン』、B面に『急がば廻れ』と『10番街の殺人』といった具合で、当時のベンチャーズ・ファンにとってはこれ以上ない豪華なラインナップでした。オレンジ色のジャケットでしたが、レコード盤を取り出す部分が擦り切れそうになるくらい小さなレコードプレーヤーで何度も何度も聴きまくったも

のです。

日本の若者世代にエレキサウンドの大地ができた翌昭和41年6月、アメリカで『GO WITH THE VENTURES』という彼らの新しいアルバムが発売されます。オリジナル曲とカバー曲を併せて12曲収録された中に『GINZA LIGHTS』と題されたオリジナル曲がありました。

作者名として「Taylor & Wilson」と記されているので、ドラムスのメル・テイラーとリズムギターのドン・ウィルソンの共作なのでしょう。ベンチャーズがオリジナル曲を創作する際、タイトルはすべて完成後に曲

のイメージをもとに決定していたそうなのですが、少しくスパートニクスのメロディーラインを思わせるこの曲に、日本滞在時のイメージを重ね合わせました。きっと米国原盤を最初に見た東芝EMIの担当者は、新作アルバムに記された「ギンザ」の文字に色めきたったことでしょう。『GINZA LIGHTS』のメロディーに歌詞がつけられ、山内賢と和泉雅子のデュエット第2弾『二人の銀座』として再生されたのは、米国発売から約5か月後のことでした。